

【研究ノート】

ドーセント・ツアーのエスノグラフィ —サンノゼ日系アメリカ人博物館における 「フォーラムとしての博物館」をめぐる—

松永 千紗

総合研究大学院大学 文化科学研究科 地域文化学専攻

要 旨

本稿の目的は、アメリカ合衆国カリフォルニア州サンノゼ日系アメリカ人博物館における展示解説員「ドーセント (docent)」および彼らが企画する館内ツアーに着目し、当該博物館における「フォーラムとしての博物館」の実現を論じるものである。「フォーラムとしての博物館」とは、ダンカン・キャメロンによって提唱された博物館のあり方の一つであり、従来の博物館が批判的に見直された1980年代後半以降、博物館の目指すべき指針として、研究においても実践の場においても広く取り上げられている。しかし、「フォーラムとしての博物館」の概念が実現している具体的な事例を記述した研究は少なく、本稿は博物館への参与観察から事例を詳述し、分析することで、従来の枠組みとはやや異なる着目点の提供を試みる。

サンノゼ日系アメリカ人博物館は、サンノゼ地域の日系アメリカ人（以下、日系人）が自らの歴史を展示している小規模な博物館である。ドーセントツアーは、館内の展示解説を行うものであるが、その内容はマニュアルによる統一が図られておらず、ドーセントごと、来館者ごとに異なっている。本稿ではドーセントツアーがどのように構築され、実践されているのかを参与観察から分析した。

ドーセントは、当事者性を有する記憶の保持する日系二世・三世ドーセントと保持しない日系人・非日系人ドーセントに分けられる。戦時強制収容や日本町での暮らしの記憶を有する日系人ドーセントは、展示物から想起させた当事者性のある記憶をツアーに用いる。また来館者が同様に当事者である場合、ツアーはお互いの記憶を共有する場へと変化していた。一方で、若い日系人や非日系人ドーセントは、他のドーセントやツアーを通して出会う当事者性のある日系人来館者の語りを収集し、取捨選択し、ツアーに用いていた。こうした場での語りには、常設展示とは必ずしも一致しない記憶が含まれており、多様な視点が共有されていた。ツアーの中では、来館者がドーセントから学ぶだけでなく、ドーセントもまた来館者から気付きを得ていた。以上のことから、サンノゼ日系アメリカ人博物館は対話性と多声性を有した「フォーラムとしての博物館」であると結論づけた。

キーワード：日系アメリカ人、博物館、「フォーラムとしての博物館」、展示解説員、ドーセントツアー、語り、共有

1. はじめに
2. フィールド概要
3. サンノゼ日系博物館におけるドーセントとは誰か
4. ドーセントによるツアーの構築
 - 4.1 多様な情報源からの解説
 - 4.2 「ストーリー」はどのように収集されるか
 - 4.3 「いいとこどり」するドーセントたち
5. 来館者とドーセントの相互関係
 - 5.1 来館者との会話で進行するツアー
 - 5.2 「まとめの会話」における議論への参加
 - 5.3 来館者との対話のドーセントへの影響
6. おわりに

1. はじめに

サンノゼ日系アメリカ人博物館 (Japanese American Museum of San Jose) (以下、サンノゼ日系博物館) はカリフォルニア州サンノゼ市日本町に所在する、サンノゼ地域の日系アメリカ人の歴史を展示している博物館である。日系コミュニティによって運営されており、展示はすべてサンノゼ出身の日系アメリカ人 (以下、日系人) の手で作られた。本稿は、この博物館における展示解説員「ドーセント (docent)」および彼らが企画する館内ツアーに着目する。

ドーセントとは、博物館や美術館などにおける展示解説員を指し、主にアメリカ合衆国内で用いられている。『The Manual of Museum Exhibitions』では、「ボランティアか有給の、展示解説のためのガイド」とされており、展示を分かりやすく来館者に解説することを役割としている (Load and Load 2002)。アメリカ合衆国以外では、展示解説員を「インタープリター (interpreter)」と呼んでおり、こちらの呼称が一般的である (西村 2016)。ドーセントやインタープリターなどの博物館で働く人々には博物館の「伝えたい姿勢と知識を適切に代表している」ことが求められる (フォーク・ディアキング 1996: 105)。そのため、展示解説員にはマニュアルに則ったトレーニングプログラムが設定され (齋藤 2007; 粕谷 1992)、解説の内容をある程度統一させている場合が多い。

しかし、本稿で扱うサンノゼ日系博物館にお

いてドーセントが行う館内のガイドツアー (以下、ツアー) の内容は、ドーセントごと、また来館者ごとに異なる。ツアーの内容は、ドーセント間で統一されていないのである。にもかかわらず、博物館を「適切に代表しているのか」という点に関して、来館者から疑問が持たれていない。むしろ、来館者もドーセントによるツアーがそうした特徴を有することを理解しており、来館者側からドーセントが指名される場合もあるのだ。サンノゼ日系博物館のツアーは来館者から高い評価を受けており¹⁾、博物館を特徴づけるサービスのひとつとなっている。本稿は、こうしたドーセントが行うツアーによって、サンノゼ日系博物館が「フォーラムとしての博物館」を実現しているのかを検討するものである。

事例を具体的に検討する前に、まずダンカン・キャメロン (Duncan Cameron) による「フォーラムとしての博物館」という概念とこれに関連する先行研究を整理しておきたい (Cameron 1971)。「フォーラムとしての博物館」とは、1971年にキャメロンによって提唱されて以降、従来の博物館から脱却するためのアイディア、また、これからの博物館が目指すべき指針として多くの論文および博物館・美術館における実践において、広く用いられてきた。キャメロンは、博物館には「テンプルとしての博物館」と「フォーラムとしての博物館」があるとしている。前者では、「意義深く、価値あるものに限って、安置され」、「教義 (the faith)」を再確認する機会を

提供している (Cameron 1971: 17)。ここでいう「教義」とは、来館者が属する社会における既存の価値観であり、「テンプルとしての博物館」では、この既存の価値観を再確認し、さらに強化するような経験を提供する。このような特権的で批判の許されない「テンプルとしての博物館」に相対するのが、「フォーラムとしての博物館」である。キャメロンは、「フォーラムとしての博物館」を「議論 (confrontation) と実験 (experimentation) の場」であると述べた (Cameron 1971: 18)。その特徴として、「抵抗」、「異議申し立て」、「実験」、そして「革新」を挙げており、それらは、「フォーラムにのみ可能なもの」なのであるという (Cameron 1971: 18)。また、「フォーラムは戦いが行われる場所であり、テンプルは勝者が休むところである。前者は過程 (process) であり、後者は成果物 (product) である」 (Cameron 1971: 21)。つまり、「フォーラムとしての博物館」は、常に議論と実験が繰り返される場であり、「テンプル」やそこに安置された「宝物」、また既存の価値観に対して、抵抗し、また異議を申し立て、さらに革新を促す場であると言える。また、「フォーラム」は、議論が完成し、「成果物」になってしまうと、「テンプル」とになってしまうのである。

キャメロンによる「フォーラムとしての博物館」という指針の提案は、博物館のあり方が批判的に見直され始めた1980年代後半から注目を浴び始めるようになった。まず『Exhibiting Cultures』において、イヴァン・カープ (Ivan Karp) とスティーヴン・ラヴァイン (Steven Lavine) が引用している (Karp and Lavine eds. 1991)。また、日本においては、吉田憲司による研究 (1999, 2013) と国立民族学博物館における「フォーラムとしての博物館」をキーワードとした一連の研究が成果として挙げられる。例えば、伊藤敦規は国立民族学博物館におけるアメリカ先住民ホピ族の研究講演の事例から、招聘事業の意義を「フォーラムとしての博物館」という

観点から論じている (伊藤 2015)。また、博物館内においてフォーラムを作り出す試みとして企画されたワークショップの分析 (佐藤 2002) などがある。また、負の記憶を展示する博物館の研究 (竹沢編 2015) でも、フォーラムが論じられてきた。

本稿では、「フォーラムとしての博物館」の要素として、吉田が強調する「対話性」と「多声性」に着目する (吉田 1999, 2013)。吉田は、世界中の情報や人の集まる十字路における具体的な装置としての「フォーラムとしての博物館」を提示する際、「そのミュージアムには、双方向的な対話性が必須のものとして要求され」と述べる (吉田 1999: 219)。「展示する側と展示される側、さらにはその展示を見る側とのあいだ」で展示にまつわる対話が持たれることが、「フォーラムとしての博物館」の必須条件なのである (吉田 1999: 219)。吉田による2013年の著書では、2008年9月11日から開始した「Self and Other アジアとヨーロッパの肖像」というアジア・ヨーロッパ・ミュージアム・ネットワーク国際協働巡回展を制作・公開する実践において、18カ国50名以上のキュレーターがひとつの展覧会を作り上げることで、多声的な展示が実現する事例を提示している (吉田2013: 72-169)。様々な背景を持ったキュレーターが意見を出し合い制作することで、「さまざまな解釈、複数の物語に開かれている」展示が作り上げられた (吉田 2013: 140)。こうした吉田 (1999, 2013) の一連の実践的な研究から、「フォーラムとしての博物館」は、「対話性」と「多声性」によって、支えられていると考えることができるだろう。

それでは、ドーセントごとに多様な歴史を解説するツアーを提供するサンノゼ日系博物館では、「対話性」と「多声性」によって「フォーラムとしての博物館」が実現されているといえるのだろうか。参与観察やインタビュー、聞き取りなどのフィールド調査によって得た具体的な事例を元にこの問題を検討する。以下では、ま

ずサンノゼ日系博物館の所在地であるサンノゼ日本町の概要を述べる。続いて、博物館の設立経緯と2018年現在の常設展示を紹介する。次にドーセントについて整理し、ツアー内容の分析を行う。最後に、ドーセントによるツアーを「フォーラムとしての博物館」という点から論じる。

2. フィールド概要

本稿において調査の対象となるサンノゼ日系博物館では、「大ベイエリア²⁾の日系アメリカ人の歴史、文化、アートを収集、保存、共有すること」をミッションとし、「100年以上続く日系アメリカ人の歴史に関する常設展示と企画展示において、独自の収集品を展示」している³⁾。ここで述べられている「日系アメリカ人」とは、明治元年から戦前までに日本からアメリカに渡った日本人移民とその子孫たちを指す。移民第一世代である日本人移民を一世、その子どもを二世、二世の子どもを三世と呼び、近年は四世や五世たちへと世代が広がっている。また戦後に渡った日本人移民を新一世、その子どもを新二世と呼ぶ。一世から新二世までの世代を含めて展示の対象にしていると考えれば、「100年を超える年代記」となるのである。また、サンノゼ日系博物館を訪れる来館者の3割は、こうした二世から五世たちや新二世といった日系人である⁴⁾。

サンノゼ日系博物館は、カリフォルニア州サンノゼ市の中心地から約2キロに位置した「サンノゼ日本町(San Jose Japantown)」に所在する(写真1)。サンノゼ日本町は、サンフランシスコの日本町、ロサンゼルスのリトル・トーキョーと並び、カリフォルニア州に現存する3つの日本町のひとつである。日本町を象徴するランドマークによって空間の範囲が可視化されており(杉浦 2013)、そこには2018年現在も日本食レストランや日系スーパーマーケットのほか、1900年代前半に日本人移民によって建てられた「一世



写真1 サンノゼ日本町のメインストリート(2016年11月12日、筆者撮影)

記念会館(Issei Memorial Building)」をはじめとする、歴史的建造物が保存されている地区である。また、日系アメリカ人市民協会(Japanese American Citizens League)のサンノゼ支部、日本町コミュニティ会議(Japantown Community Congress of San Jose)が拠点を置いている。ほかに、浄土真宗本願寺派サンノゼ別院と日本人移民によって開かれたウェスレーメソジスト教会、シニア向けサービスセンターである友愛会(Yu Ai Kai)、シニア向け居住施設フジタワー(Fuji Tower)、同じくシニア専用アパートなどが立ち並んでいる。これらの日系人にとって重要である組織の拠点も日本町内部に所在していることから、日本町はサンノゼ地域の日系人たちの中心地であるといえる。サンノゼ日系博物館は、こうした日本町を象徴し、また展示において日本町と日系人の歴史を示す、サンノゼ地域の日系コミュニティにとって非常に重要な博物館である。

サンノゼ日本町を含むサンノゼ市は、サンタクララ平原の一部であり、1960年代まで農業が盛んな土地として「心喜ぶ平原(the valley of heart's delight)」と呼ばれていた。サンタクララ平原は、2018年現在シリコンバレーとして知られており、GoogleやApple、Intelなどの巨大企業が軒を連ねている。その影響によりサンノゼ市

の人口は、1980年には約60万人、2000年には約90万人と増加を続け、2017年には約105万人を超え、カリフォルニア州第三位、全米で第十位の都市となった⁵⁾。人種比率を見てみると、アジア系 (Asian) が最も多く34.2%、ヒスパニック系 (Hispanic) が32.8%、ヨーロッパ系 (White) 26.7%、アフリカ系 (African-American) 2.8%、その他3.5%となっている⁶⁾。

初期の日本人移民たちは、サンノゼ地域を含むサンタクララ平原で農業を主な生業とし、日本町に生活の基盤を置いていた。『米国日系人百年史』によると、1880年代半ばに植木園を始めた3名がサンノゼにおける日本人の最初の記録である (新日米新聞社 1961: 420)。1895年には中国人移民の人口を上回り、約2,300名の日本人移民が入植している (新日米新聞社 1961: 420)。日本人移民は、当初、中国人移民と共に中国人町の一角で生活していたが、人口規模の拡大に伴い、同地区に日本町を形成した。同時に、サンタクララ平原における農業で成功を収め、1940年代で390ヶ所の農地を日系人が所有するまでになった (Lukes and Okihiro 1985: 115)。

1890年代から1940年代までの50年間に発展したサンノゼ日本町は、1941年12月7日で一度その歩みを止める。1941年、真珠湾攻撃の翌日、連邦捜査局 (Federal Bureau of Investigation) によって日系社会の指導者層が一斉に逮捕された。さらに翌年2月19日に発布された大統領令9066号によって、サンノゼ日本町を含む西海岸の特定地域に住む日系人たちは、全米10ヶ所に作られた強制収容所 (通称、キャンプ) へ送られることとなった。サンノゼの多くの日系人は、移動のために一度サンノゼ州立大学 (San Jose State College)⁷⁾ に集められ、そこからサンタアニタ集合センター (Assembly Center) を経由し、最終的にハートマウンテン強制収容所に収容されることとなる (Fukuda and Pearce 2014: 145)。2年から3年後、強制収容所から解放された日系人は日本町へと戻ってきた。

サンノゼ日系博物館では、以上のようなサンノゼ地域における戦前から戦後すぐの日系人に関する歴史展示が中心である。サンノゼ日系博物館は、1983年に行われたサンタクララ平原の日系人に関する調査から始まった (Lukes and Okihiro 1985)⁸⁾。研究者であるゲイリー・オキヒロ (Gary Y. Okihiro)、地元歴史家エイイチ・サカウエ (Eiichi Sakauye)、及びティモシー・ルークス (Timothy J. Lukes) が率いるサンノゼ市調査委員会によって3年をかけて調査が行われた。その際に集められた写真などの資料を元に、1987年、日系アメリカ人資料センター (Japanese American Resource Center) が発足する。その後、組織を拡大させ拠点を獲得し、「サンノゼ日系アメリカ人博物館」として新館を建設するに至った。開館は木曜日から日曜日の週4日、12時から16時までであり、2017年における年間来館者数は約4,000名に上る⁹⁾。国内外から団体見学の受け入れも行っており、特に中学校、高校からの校外学習に使われることが多い。

博物館内部における展示は、以下のような構成になっている (図1)。正面玄関から入ると、右手にミュージアムショップ、左手に受付があり、ここで来館者は入館料¹⁰⁾を支払う。来館者は進入できないが、右手奥に館長と関係者が使うオフィス、左手奥に関係者専用の休憩室がある。展示室は日本町展示エリア、農業展示エリア、キャンプ展示エリア、442展示エリアの4エリアに分かれている。まず日本町展示エリアの入り口には、操作が可能な大画面に太平洋を中心とした地図が表示してあり、日本からハワイを経由し、カリフォルニアに至る矢印で移民初期の経緯が記されている。エリアの中心には日本町の古地図と現在の地図があり、比較できるようになっている。日常生活や宗教、スポーツなどのテーマに合わせて写真と雑貨が展示されている。次に、展示室を横切り、一旦外に出て、隣接する農業展示エリア専用の建物に入る。農機具を中心に、農業が盛んであった時代の遺物

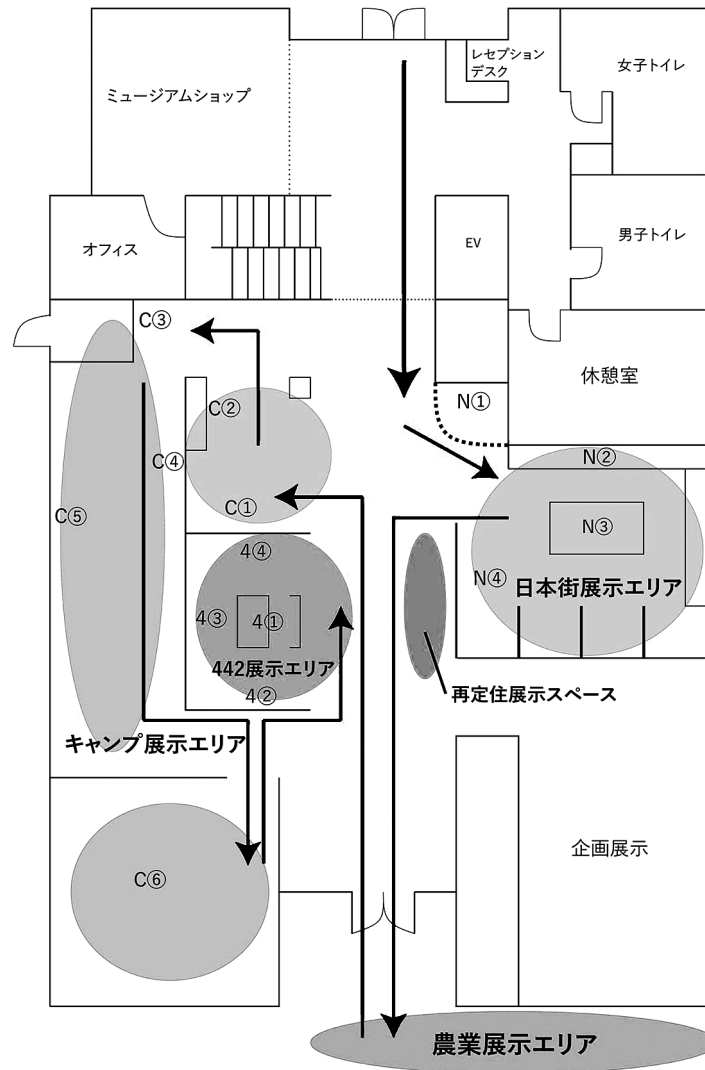


図1 新館内部の展示エリア。赤の矢印はドーセントが案内する順路を示し、番号及びアルファベットは下記展示内容一覧に対応する。筆者作成。

が所狭しと展示されている。次に、再び室内の展示室入り口まで戻ると、拡大されたセピア色の家族写真の前に、大小様々な古い鞆が積み上げられている。キャンプ展示エリアの入り口では、強制収容所へ移動する際に持っていた鞆と名前、家族番号が記されたタグを象徴的に展示している。壁に沿って進めば、全米10ヶ所のキャンプがそれぞれ解説されている。キャンプ展示エリアの最後には、強制収容所の住居であったバラック小屋の内部を忠実に再現した部屋があり、実際にキャンプ内で使用されていた家具が並べられている。最後の442展示エリアは、3方

向の側面を地図と年表で囲まれており、中央に設置されたテレビでは戦争に参加した退役軍人たちのオーラルヒストリーが再生されている。

【日本町展示エリア (N)】 (写真2)

- ①日本からアメリカ合衆国への移民過程
- ②戦前を中心としたサンノゼ日本町の写真
- ③日本町の古地図と現在の地図
- ④サンノゼ日本町における生活のテーマ別展示

【農業展示エリア】 (写真3)

- ①戦前期サンノゼにおける農家の生活



写真2 日本町展示エリア



写真4 キャンプ展示エリアの一部



写真3 農業展示エリア



写真5 バラックを実寸大で再現した部屋

- ②サンノゼ市郊外の過去の農地地図
- ③日系農家が使用していた農機具の解説
- ④サカウエが所有していた納屋の再現展示

【強制収容所(通称キャンプ)展示エリア(C)】(写真4および5)

- ①真珠湾攻撃と強制収容の開始
- ②集合センターと名前の代わりにつけられた番号札
- ③アメリカ合衆国内キャンプ所在地地図
- ④ハートマウンテン強制収容所全体図とキャンプでの生活概要
- ⑤各キャンプの紹介
- ⑥居住用の部屋(バラック)を実寸大で再現した部屋



写真6 第442連隊戦闘団展示エリア全体

【第442連隊戦闘団¹¹⁾展示エリア(4)】(写真6)

- ①戦時中の日系人兵士部隊概要
- ②戦時情報局(Military Intelligence Service)の概要



写真7 再定住期スペース全体

- ③日系人兵士部隊が特に活躍したヨーロッパ戦線の解説
- ④日系二世兵士の語り

【再定住期スペース】(写真7)

再定住期に撮られた写真と所有者による手書きのキャプション

議論に入る前に、サンノゼ日系博物館での調査における筆者の立場を明らかにする必要がある。筆者はサンノゼ日系博物館において、ボランティア兼インターンシップ生として、2016年10月から2017年4月までの7ヶ月間、さらに2017年9月半ばから10月半ばまでの1ヶ月間、計8ヶ月間のフィールドワークを行った。筆者自身も他の若手ドーセント候補たちに混じり、ドーセントになるためのトレーニングを受け、3ヶ月目からは実際に来館者にツアーを提供しており、主に日本語での団体ツアーと平日の少人数グループへのツアーを担当していた。したがって、以下の内容には、筆者自身がサンノゼ日系博物館のドーセントとなる過程における記録や筆者を同じドーセントという立場であると認識した上で行われた会話などが含まれていることを留意されたい。

3. サンノゼ日系博物館におけるドーセントとは誰か

ここで、サンノゼ日系博物館のドーセントについて述べておきたい。2017年10月の調査時点で、実働するドーセントは17名であった。17名のうち5名が高年層(80歳～95歳)、2名が中高年層(65歳～79歳)、4名が中年層(30～64歳)、6名がユース層(16歳～29歳)である¹²⁾。実際にドーセントとして動いている数は中高年層以上が圧倒的に多い。サンノゼ日系博物館では、どのような人が、どのようなきっかけでドーセントとなるのだろうか。ユース層は学校に定められた学外ボランティア活動時間を埋めるために月に一度やってくる高校生や夏休みの大学生、就職活動中の若者など期間限定である場合が多い。また中年層も仕事の合間を縫って参加している為、サンノゼ日系博物館での滞在時間は圧倒的に少ない。対して、中高年層がボランティアを始めたきっかけには「退職」が最も多く、博物館への滞在時間も長い。中高年層以上のドーセントたちは、10年以上毎週決まった曜日の決まった時間を担当し、既に生活の一部やライフワークと化している人もいる。ドーセント全体のエスニック背景は、日系人が9割を占めている。しかし、ユース層に限って見ると、約半数のドーセントは非日系人である。代わりに日本語を勉強している、または、していた経験のある者や中国系、フィリピン系などアジア系の背景を持つ者が占めていた。日系人の中では、世代でいうと、三世が最も多い。ただし、三世の幅は広く、キャンプ生まれの三世から戦後しばらく経ってから生まれた三世までと様々で、中年層から高年層にまたがっている。次に四世以下世代と新二世が多く、最も少ないのが二世で、最高齢者はサンノゼ日系博物館の創設者でもある95歳のジミー・ヤマイチ氏¹³⁾であった。

サンノゼ日系博物館におけるドーセントによるツアーは、博物館内外において重要視されている。ドーセントの教育担当でもあり、指名さ

れてツアーをすることもあるH氏によると「ドーセントはミュージアムの顔だ」という。H氏のように、受付での入館料支払いを除けば、博物館内において来館者が接触する人間はドーセントのみであり、ツアーの時間によっては来館者が館内で過ごす時間のほとんどを共にすることから、まさしく「顔」というべき性格を有していると館内では認識されている。サンノゼ日系博物館では、来館者の6割から7割がドーセントによるツアーに参加する。その理由として、ドーセントが待機している日の場合、受付では必ず来館者にドーセントによるツアーについて案内をすることになっており、無料であることも相俟って、受付での提案からツアーを希望する人が多い。しかし、事前にドーセントによるツアーがあることを知った上で予約を入れる人、さらにはどのドーセントが良いかといったアドバイスを受けて来館し、ドーセントを指名する人もたびたび見られた。このことから、外部からの来館者も、ある程度ドーセントによるツアーの重要性を認識しているといえる。

サンノゼ日系博物館では、ドーセントによるツアーの内容に関する所定のマニュアルは存在しない。唯一、年号や事件の名前などの暗記が必要な部分に関する辞書的な冊子が存在するが、筆者の調査中には、使われている場面をあまり見なかった¹⁴⁾。基本的にはツアーの順路や解説の内容は、他のドーセントが実施しているツアーに来館者と共に参加し、ドーセント自ら見聞きすることで覚えていく。これをドーセントトレーニングという。教育担当者は明確に決まっていないが、ユース層の場合は日系三世のH氏とG氏のドーセント・ツアーからツアーの基本的なツアーの進行方向を学び、以降は自分の希望日に居る他の熟練ドーセントが行うツアーでトレーニングを行う。たとえ展示されている歴史の当事者であっても、ドーセントトレーニングは必須とされており、同世代や下の世代のドーセントに付き、同じくツアーに参加することでツアー

の進行方法や歴史を説明する際の言い回しなどを覚えていた。トレーニングの中では、具体的なツアー内容についての指導はない。ただし、ツアーを始める前に自己紹介をし、来館者の滞在予定時間を確認すること、またツアーの最後に、それまでに学んだことを振り返って感想の交換や議論を行う「まとめの会話（Closing Conversation）」の時間を持つことが指示される。また、ドーセントは一名につき、来館者一名から多い時では十数名まで対応する。筆者がドーセント・ツアーを行った最大人数が約15名で、それ以上の人数になるとドーセント一名で展示を案内することは難しくなる。大人数での来館は原則として事前の申込みが必要とされている。所要時間は平均1時間半であるが、来館者の反応がよく、質問が多い場合や「まとめの会話」での議論が盛り上がった場合、来館者自身が語る場合には、より時間的に長く、内容が分厚くなっていき、2時間半を超えるボリュームとなることも、筆者の観察時にはままあった。

以上、サンノゼ日系博物館におけるドーセントがどのような人々か、どのようなトレーニングを受け、ツアーを行うのかをまとめた。次に、ドーセントによるツアーの構築を具体的事例から検討していく。

4. ドーセントによるツアーの構築

ドーセントはどのようにしてツアーを構築するのだろうか。サンノゼ日系博物館においてドーセントが提供するツアーの内容は、知識的な解説部分と記憶の「ストーリー」¹⁵⁾部分に大別できる。前者は、展示物の一般的な説明、また年号や歴史的出来事などの暗記された知識であり、後者は、展示物に関連する自らの記憶や他者から語られた記憶をもとに、ドーセントが口述するものである。先に述べたように、ドーセントは、時系列に並べられた常設展示に沿いながらも、それぞれに異なったツアーを来館者に提供する。そうした差異は、ドーセント自身が解説と「ス

表1 ドーセント一覧 (引用順)

H氏 (男性)	ドーセント教育係の一人。日系三世。60代。ユース層ドーセントが「まとめの会話」の進行方法をしばしば手本とする。
G氏 (男性)	ドーセント教育係の一人。日系三世。60代。
D氏 (男性)	新二世の大学生。20代。日本語と英語のバイリンガル。イベント等にもよく参加し、情報をツアーに用いる。
T氏 (男性)	日系二世。90代。実家は農家だった。強制収容経験者。
R氏 (男性)	日系二世。80代。少し日本語が話せる。強制収容経験者。
E氏 (男性)	ユダヤ系アメリカ人、20代。若いドーセントの中で最も評判の良いドーセントで指名されることもある。日本語が話せる。
V氏 (男性)	日系三世、50代。ツアーは家族の話を中心とする。
C氏 (男性)	中国系アメリカ人。10代、大学生。夏休みを利用したボランティアとして博物館に参加。
B氏 (男性)	中国系アメリカ人。20代、就職活動中。日本語を大学で学んでいた。
Y氏 (女性)	日系二世。80代、元教師。日本語が話せ、日本語でのツアーも行う。強制収容経験者。

(全て調査を行なった2016～2017年当時の情報による)

トリー」を、常設展示という枠の中にどのように配置するかが異なることから生じていると考えられる。以下では、参与観察で得られた事例から、ドーセントによるツアー構築を分析する。なお、引用するドーセントについては表1にまとめた。

4.1 多様な情報源からの解説

ツアーにおける解説部分は、ドーセント間で共通している内容が基礎となる。例えば、日本からの初期移民を提示する展示では、明治元年に国同士の協定によってハワイへ渡った日本人労働者である「元年者」が解説される。また、農業展示エリアに設置されている大きなベルトコンベア付き農機具に関しては、それらの展示物を寄贈したエイイチ・サカウエが開発した梨の分類器であることが解説される。このような暗記された知識は、ドーセントトレーニングの際に、熟練ドーセントのツアーで述べられていた内容であり、トレーニングで貰える辞書的な冊子にも記されている内容である。新人ドーセントたちはこれらを暗記し、自らのツアーに組み込むのである。しかし、どこで何を話すのか、

必ず話すべきことは何かが明確に定められているわけではないため、ドーセントは来館者の滞在予定時間や年齢層、来館目的に応じて、どの部分を説明し、どの部分を説明しないのかを判断する。さらに、トレーニングや他のドーセントのツアーといったドーセント全体に共通する機会に得た情報源以外にも、ドーセント自身が個人的に取り入れた知識を解説としてツアーに取り入れる場合もある。大学生ドーセントD氏のツアーでは、ある日を境に、ツーレイク強制収容所¹⁶⁾の展示に対して、以下のような解説が追加された。

これは、先週あったミュージアムのイベントで発表されていたのですが、このようなキャンプは、床下を掘って食料庫として使われていて、それから子どもの遊び場になっていたそうです。また、バラックの周りには、庭師をしていた人が、大きな庭を作っていました。池も作っていたそうです。それから、キャンプの中で、どの庭が一番か人気投票もしていたそうです¹⁷⁾。

「先週あったミュージアムのイベント」が指すのは、2017年1月21日にサンノゼ日系博物館で開催された一般公開のイベント「私たちの歴史を掘り起こす (Digging Up Our History)」という強制収容所の考古学的調査に関するイベントである。強制収容所の発掘調査によって、住居や公共スペースが具体的な図面で明らかとなり、調査対象となった住居に実際に住んでいた人物の証言と合わせて報告された¹⁸⁾。D氏はこのイベントに参加しており、次の週にはすぐにツアーの解説へ内容を反映させている。他にも、ある三世ドーセントは過去に参加していた日系退役軍人たちへの聞き取りボランティアで得た知識をツアーに用いており、また日本人ドーセントのひとり、ドーセントになるために50冊の本を読んで当時の日系人たちの状況を細かに解説していた。このように、ドーセントは博物館内外の情報源から解説に用いることができる内容を集め、ドーセント自身の学びを解説部分へ柔軟に反映させていた。

4.2 「ストーリー」はどのように収集されるか

ドーセントが行うツアーの「ストーリー」部分では、ドーセント自身の記憶の語り、また、他者から収集した記憶の語りを用いられる。それ故に、共通する知識に自らの学びを追加していく解説部分以上に、ドーセントの個性が表れる。どのように「ストーリー」を収集し、どの「ストーリー」を取捨選択してツアーに用いるのかといった点に関して、マニュアルは設定されておらず、すべてドーセントの判断に委ねられているため、ドーセントの独自性が強く反映されるのである¹⁹⁾。

ドーセントのなかでも、ツアー内容に自らの記憶を用いることが可能であるのは、二世と一部の三世だけである。例えば、二世T氏は、農業展示エリアでイチゴ収穫用の小型一輪車とそこに積まれたカゴを前に、以下のように語る。

昔は子どもにとって、イチゴの手摘みが唯一の小遣い稼ぎだったんだよ。この箱(イチゴ収穫用カゴを1ダース並べる箱)をいっぱいにして、50セント。僕は、そのお金を日本町に持って行って、初めて腕時計を買った。金色のね。ただしお金が足りなくて、父親に出してもらったのだけど。(括弧内筆者注)²⁰⁾

T氏はサンノゼ郊外の農家で生まれ育ち、日本町にも父親に連れられてよく遊びに行っていた。そこには日系人が経営する時計屋があり、ガラスケースに時計が並べられていたようだ。イチゴは見栄えがよいものをきれいに並べなければならず、箱いっぱいにするのが大変であったという。T氏だけでなく、サンタクララ平原には戦前から日系人イチゴ農家が多かったため、収穫で小遣い稼ぎをした幼かった頃の記憶は、二世ドーセントの口から、農業展示エリアでよく聞くことができた。

また、同じ展示エリア内における同世代ドーセントでも、ツアーに取り入れる「ストーリー」は、まったく違ったものである。T氏と同じく、日系二世のR氏は、農業展示エリアのなかでも、イチゴではなく、キッコマン社が醤油を日本から輸出する際に用いていた樽に注目するように来館者を促し、以下のように語る。

僕の父親は、この樽を欲しがった。盆栽をここにに入れて、育てるためだった。中身を出して、きれいに洗って、またきれいな水を入れて外に置いておく。そうして、醤油の塩分を抜くんだ。塩分があると、盆栽が枯れてしまうからね²¹⁾。

様々な展示物に関連付けた自己の記憶を元にした「ストーリー」は、ドーセントによって、どこで何を話すかが異なり、また同じ展示エリアでも、どれに注目し、何を話すかが異なる。

ただし、脈絡なく語るのではなく、常設展示として設置してあるモノによって関連付けられている。このように、二世や三世ドーセントは自らの記憶から成る「ストーリー」を、ツアーの中に取り入れていく。

常設展示に沿ってツアーが構築されるということは、常設展示の内容によってツアーの内容が制限を受ける可能性があるということでもある。常設展示では、日本から移民し一生懸命働いて生活を安定させ、農業分野で財をなしたが、強制収容によってすべて失い、辛い生活を送り、再びサンノゼに戻って成功する日系人の姿が、歴史という形で描かれている。この流れの下敷きには、モデルマイノリティとしての日系人成功物語という言説が存在している。この言説は、戦中から戦後にかけての日系人社会の戦略とアメリカ社会におけるエスニック多元主義の高揚から作り出されたものである（南川 2007）。無自覚的にサンノゼ日系博物館における常設展示に用いられているこの言説は、人種主義的なアメリカ社会の構造を肯定してしまう可能性をはらんでいることが指摘されている（南川 2007; 東 2014; ダリティ・南川 2006）。この言説では、日系人の成功の理由を移民元である日本に起因する文化的資源と日系人自身による努力に求められる。それは、アメリカ社会内部の格差や不平等の理由をアメリカ社会内部に求めるのではなく、『『成功できない』集団の側に問題があるかのような批判を正当化することにもなる』のである（南川 2007: 226）。そうした常設展示を枠とする通常のツアーでは、この言説に沿わない事例が「ストーリー」として選択されることはない。例えば、強制収容所で幼少期を過ごした日系二世80代男性R氏のツアーでは、強制収容所内で起こった楽しかった出来事が話されることは、質問された場合を除いて、ほとんどなかった。R氏はツアーの中のキャンプ展示エリアで、以下のように述べる。

キャンプに行くときはこの名札を全員服に付けなければならなかった。……キャンプに行く前日、母親が僕の新しい服を買いに連れて行ったんだ。僕はなんで新しい服を買うんだろうと思っていた。それをこの鞆の中に入れて持っていった。……僕の番号は、XXXXだ。誰も忘れていないよ。（キャンプに行く時、）僕に名前はなかったんだ。（括弧内筆者追記）²²⁾

「この名札」は、キャンプ展示エリアの入り口にある、キャンプへ移動する際に全員が付けることが義務付けられた縦長の名札のレプリカで、すべてに家族番号が振ってあり、キャンプの移動中、呼ばれるときは個人名ではなく、その番号が呼ばれていたという。人権を無視した移動の場面で象徴的に使われることが多い名札をビジターに示しながら、R氏は空で自分の番号を読み上げてみせた。また、「この鞆」は同じくキャンプ展示エリア入り口にある積み上げられた手提げかばんの中でも、子どもが使っていたとみられる小さな古びた鞆のひとつを指している²³⁾。このように幼児期の自己の記憶による「ストーリー」として来館者に提示する際は、展示物を効果的かつ象徴的に用い、強制収容という出来事の非人道的な部分を強調する。

ただし、展示の言説から外れる内容が、館内においてまったく表出しないというわけではない。時に現場では、収容所におけるポジティブな思い出が想起され、語られる場合もある。R氏はキャンプ展示エリアで野球少年の写真を前に、ドーセントのトレーニングをする筆者に対して、笑いながら以下のような内容を語った。

野球をしたよ。……とても楽しかった。それから、キャンプの敷地の奥に、フェンスがないところがあって、そこから外へ抜け出して、隣の街まで遊びに行っていたよ。『ぼくはわるい子だからね』。（二重括弧内日本語）²⁴⁾

強制収容されたとき、R氏は8歳の子どもであった。キャンプ内には同じ年頃の子どもたちがたくさん居り、時間もあった。R氏の記憶には、ツアーで語られたようなつらい記憶と筆者に語ったような楽しい記憶が混在していると考えられる。しかし、ツアーでは前者のみが用いられる。後者の楽しかったという記憶は、常設展示の流れにそぐわないものであるために、「ストーリー」として積極的には提示されない傾向が、筆者の調査中には見られた。ただし、トレーニング中のドーセントであり、日本人の学生である筆者に対しては、このような展示が擁する言説に制限されない語りが共有される場合もあった。また、来館者やユース層ドーセントからの質問、ふとしたきっかけで口に出される何気ない思い出話では、そうしたポジティブな記憶語りが共有された。

4.3 「いいとこどり」するドーセントたち

T氏やR氏のように、自らの記憶を有さないドーセントは、どのようにツアーにおける「ストーリー」を構築するのだろうか。ある大学生ドーセントD氏は、筆者や他のドーセントたちと共に、ツアーが上手いと評判の大学生ドーセントE氏について話をしている際、E氏のツアーを以下のように評した。

Eのツアーが評判良いのは、そりゃ当たり前だよ。本人のトークスキルもすごいけどさ、あのツアーはRとGのいいとこどりだから。(下線筆者)²⁵⁾

先に述べたように、ドーセントは熟練ドーセントたちのツアーを見学し、その内容や基礎を学ぶ。R氏とG氏はE氏がツアーを構築する際に参考にしたドーセントであり、両者ともに出張講演や指名されてのツアーが多い人気かつ技術が高い人物である。彼らの「いいとこどり」をしたE氏のツアーもまた非常に評判がよく、ユー

スなから指名されてツアーをすることや高校生団体ツアーをひとりで担当したりもする。E氏のツアー構築方法に見られるように、ドーセントがツアー内容を構築する際には、ひとりだけではなく、複数のドーセントのツアーから内容を「いいとこどり」、つまり取捨選択するのである。また、先に述べた二世ドーセントのように、展示物に関する自らの語りを有していたとしても、サンノゼ日本町、農業、強制収容、兵士の活躍など、多岐に渡る常設展示全体をカバーすることはできない。その為、すべてのドーセントが、様々な場所で収集した解説や「ストーリー」を、取捨選択し、自らのツアーに利用するといえる。

ドーセントが「ストーリー」に用いる記憶の語りは、先に取り上げたR氏やT氏といった二世ドーセントのツアーをはじめ、様々な場所や方法で収集される。まず最も身近な場所から集められたものとして、家族についての語りがある。ここでは、日系三世で約10年ドーセントを続けるV氏の事例を取り上げる。V氏のツアーにおける「ストーリー」には、展示エリアごとに、祖母・祖父・叔父・父・いとこの5名が登場する。

〈日本町展示エリア①写真花嫁への言及〉

この時の女性たちはとてもタフだった。この国で新しい生活を始めた彼女たちは、タフなパイオニアだったんだ。…祖父はお金をこの日本町でギャンブルにつき込んでいた。若い男たちはそうやって遊んでいた。…祖母は祖父に怒り、祖父のものをすべて通りに放り出して家に鍵をかけた。もしギャンブルを辞めなければ離婚すると言った。…離婚は、日本では不可能だったけれど、こちらでは男女の人口比がアンバランスだったから、離婚できたんだ

〈農業展示エリア③農機具展示、馬具への解説〉

「私のいとこは1960年代まで馬を使っていた。マウンテンビューの農家で。馬はとても頭が良く、ホイッスルが鳴ると一日の作業が終わりであることを知っていた。だから、ホイッスルが鳴ると完全に動きを止めて、それ以上は働かなかったんだ。」²⁶⁾

〈キャンプ展示エリア①真珠湾攻撃と強制収容の開始、収容命令のポスター〉

「私の父はマウンテンビューで農業をしていた。(強制収容の大統領令が發布されたとき) 丁度新しいトラクターを買ったばかりだった。大金が必要だった。…そこに近所の人がやってきて、そのトラクターを買っていかと聞いた。…たった数ドルで。」²⁷⁾

〈キャンプ展示エリア⑤ツーリレイク強制収容所〉

「(写真に写っている) 彼らはマイノリティであり、抵抗した人々だ。…この話には、自分の叔父が関係している。この写真、(写真のひとり指しながら) これが叔父だ。…彼らは、日系人からこう呼ばれていた。不忠誠組、アメリカ人ではない、非愛国者と。そして、キャンプから出た後も、叔父はこれを理由に大変な目にあった。」

「私の父もノーノーボーイと呼ばれる人だった。…多くのアメリカ人兵士たちは、彼らのことを永遠に許さなかった。」²⁸⁾ (括弧内筆者注)

V氏のツアーでは、各展示エリアの写真やラベルを指し示しながら、関連するV氏自身の家族の「ストーリー」が語られていく。V氏の祖父母からV氏自身に至るまでの三代に渡る家族史からは、展示物として置かれた白黒写真や無機質なラベルに代わって、歴史的出来事がいかに個人や家族に影響したのか、また個人がどのように歴史的出来事に関わったのかが整然と

示される。V氏のツアーでは、展示されている歴史が、目の前に居るドーセントの家族という近い距離で来館者の前に現れるのである。

家族の「ストーリー」を用いる方法は、V氏のほかに数名が実行している。しかし、ドーセントの中には家族について語るのを控える人やそもそも展示物とドーセント個人の繋がりが希薄な人も居る。そうしたドーセントたちの情報源はどこにあるのだろうか。筆者の調査からは、日系人来館者からもたらされる記憶の語りや他のドーセントから共有される「ストーリー」がツアーの中心になっていることが明らかになった。

2016年11月27日午後2時頃のことである。サンノゼ日系博物館に70代前後の日系人女性と3名の白人女性、2名の白人男性が来館した²⁹⁾。日系人女性が受付でカードを提示していたことから、彼女がサンノゼ日系博物館のメンバーシップ制度に加入していること、また、初めての来館ではないことがわかった。他の熟練ドーセントたちは全て展示室内でツアー中であったため、受付担当者の案内によって、休憩室にいたC氏が担当することになった。C氏は中国系アメリカ人の男子大学生で、2ヶ月前にドーセントとして参加し始めた。調査当時、熟練ドーセントから離れ、C氏一人でツアーを行うようになってから、まだ一週間ほどしか経っていなかった。筆者はドーセントトレーニングの一環としてC氏のツアーに参加した。日系人女性によると、彼女は二世でサンノゼ市郊外に居住しており、5名の同行者は近所に住む友人であった。今回は彼らに博物館を見せるために来館したという。ツアーが始まり、C氏を先頭に初期の日本人移民に関する展示から、日本町の写真の前に至ると、日系人女性が自らの記憶を語り始めた。これ以降、C氏はグループを先導して順路を移動する、また、歴史的出来事の一般的な事柄について簡単な解説をするにとどまった。ツアーは、日系人女性が写真や展示物から想起した記憶の語りを中心に進んだ。二世女性が話す間、C氏

と筆者は頷いて聞いているだけであった。C氏はその後、この時に聞いた二世女性の語りを「ストーリー」として自らのツアーの中に取り入れていた。

中国系で大学生のC氏や同じく大学生で日本人の筆者のような、来館者より年下で、展示物に関する過去の記憶を持たないドーセントが担当となる場合、「ストーリー」の部分はほとんどすべて日系人来館者自身が担う事例がしばしば見られた。ドーセントがC氏のように来館者の記憶語りを聞き、頷き、時折質問を投げかけながら、来館者の語りをさらに促す場面が、筆者の参加した多くのツアーで見られた。このように、ドーセントは、ツアーを通して、来館者の記憶語りを数多く聞く機会を得るのである。ドーセントが館内を案内し、解説を提供するはずのツアーにおいて、来館者の語りがツアーの中心となる場面は、筆者の調査中、年配の日系人が来館した場合に、非常に高い頻度で見られた。

こうしてツアーの中で聞き取られた語りは、非公式な雑談やドーセントトレーニングを通して、ドーセント間で共有されていく。例えば、H氏は筆者とユース層ドーセントD氏、B氏に対して、強制収容所に向かう女性の写真を示しながら、数ヶ月前にその女性自身が来館し、写真が撮られたときの状況を語った話をした。写真の中の女性は、慌ただしく荷物を運ぶ人々の中で笑っている。これまでの生活をすべて捨てて、どこへ向かうかも知らされていない状況であるにも関わらず、である。来館した女性は、この時笑っていた理由を、カメラを構えた人物から笑ってと言われて笑っただけだと述べたという。加えてH氏は、強制収容所に関連して置かれた写真は、すべて強制収容の管理をしていた政府の戦時転住局 (War Relocation Authority) によって検閲された後のものであるため、明るい表情の写真だけが残っているという解説を付け加えた。筆者はキャンプ展示エリアの中で印象的に展示されているこの写真を解説する際に、女性

の「ストーリー」とH氏の解説を採用した。また、D氏のツアーでも、その後同様の「ストーリー」と解説が加えられた。B氏のツアーではその後特に取り入れられている様子はなかった。さらに筆者とD氏は新人ドーセントへトレーニングをする場面で、この女性の「ストーリー」とH氏による解説を用いた。そうして、当事者である女性の「ストーリー」は、女性本人からH氏へ、H氏から筆者・D氏・B氏へ、筆者・D氏から他の来館者と新人ドーセントへと、解説を加えることで変化しながら共有されていった。このように、ドーセント間では来館者との対話によって得た「ストーリー」が共有され、ドーセントの判断でツアーに取り入れるか否かが決定される。また、ドーセントを通して、他の来館者、また他のドーセントへと提示・共有されていくのである。つまり、サンノゼ日系博物館では、ツアーにおいて来館者からもたらされた当事者性のある語りが収集され、また取捨選択された上で、「ストーリー」としてツアーの中に取り入れられていく。複数の視点による語りをを用いる多様な「ストーリー」から成るツアーには、「多声性」を見ることができるといえる。

5. 来館者とドーセントの相互関係

これまで、サンノゼ日系博物館のドーセントが常設展示という枠の中に配置する解説と「ストーリー」が、どのように獲得されるのかを検討してきた。年号や歴史的出来事、また展示物に関する解説は、トレーニングの際に得られる共通した情報であるが、ドーセントはそれに加えて複数の情報源から自ら学習し、その学びを解説に反映させている。また、個人的な記憶の語りから成る「ストーリー」では、一部のドーセントは自己の記憶を用いるが、多くは他者から対話を通して聞き取った当事者性のある記憶を「ストーリー」としていく。家族などに加えて、来館者を主な情報源としていた。また、それらの「ストーリー」はドーセント間で共有されて

いく。こうしたツアーの場では、ドーセントだけが一方的に話し続けるのではない。来館者からもドーセントに対して語りが提供され、また相互にやり取りをする中で、ツアーが構築されていくのである。以下では、来館者とドーセントの協働によって構築されるツアーと其中で起こる相互作用について論じる。

5.1 来館者との会話で進行するツアー

それでは、実際のツアーにおいて、ドーセントと来館者はどのように関わるのだろうか。筆者の参与観察から得た具体的な事例を取り上げる。まず3名の日系人来館者に対応するR氏のツアーについてのフィールドノートを引用する。

〈2017年10月1日フィールドノートより〉

午後1時頃、日系人女性3名が来館。80代くらいの高齢の方、60代くらいの方、50代くらいの方。話を聞くと、母親と2人姉妹だということだった。ドーセントに日系二世R氏がつく。筆者も後ろから話を聞かせてもらう。R氏も80代であるため、ビジターと同じ年代。「どこのキャンプに居た?」「ローアとジェローム」「私はハートマウンテン」といういつもの会話。来館の目的は、企画展示の中で友人が取り上げられており、その友人の病院へお見舞いに来たついでに、娘達に見せようと思ったという。また展示の中に親類と二世女性自身が写っていることを確認するのも目的のひとつ。R氏と思い出話で盛り上がりつつ進行。

このツアーはR氏がドーセントを担当した。R氏は二世女性と同じく二世で同年代であった。二人の娘たちはサンノゼ日系博物館に来館したことがなかったが、ある程度日系人の歴史を把握しているようで、主に二世女性とR氏がお互いに語り合う記憶に耳を傾けていた。3名の日系人来館者は、親戚と二世女性本人が展示写真に

写っているという情報を得て、それを見る目的でやってきていた為、特に写真を念入りに見ており、見つけたときにはR氏も一緒に声を上げて喜んでいた。

R氏と二世女性が交わした、「あなたはどこのキャンプにいたの?」という質問は、キャンプに居た経験があると思われる世代の日系人ビジターが訪れた際、二世・三世ドーセントや中高年層以上の日系人の間で、どちらかから必ず投げかけられる質問であり、そこからしばらく、キャンプから相手の出身コミュニティや帰属先を確認するような会話が続く。例えば、同じキャンプであれば、居住区ごとに設定されていた住所の代わりに番号や学校、教会などが確認され、共通の友人らしき名前が挙げられる。違うキャンプであれば、そのキャンプに居た知人友人の名前をあげて、繋がりがあるかが確認される。キャンプでの直接経験のない世代に対しては、「あなたのお父さんはどこのキャンプにいたの?」というような問いがなされ、同じように会話が進行する。このように、「どこのキャンプに居たか」は、日系人である相手の素性を把握する上で、非常に重要な会話のひとつだといえる。この会話を経た後は、二世女性とR氏が同じ展示物に対する違う語りを出し合う形でツアーが進行していった。つまり、このときのツアーは、ドーセントが主導する従来の館内ツアーではなく、お互いの記憶を辿り、共有する時間となった。

5.2 「まとめの会話」における議論への参加

こうした記憶を語り合う形のツアーでは、来館者が当事者性を有することが必須となる。サンノゼ日系博物館で展示しているのは、サンノゼにおける日系人の歴史であり、常設展示に沿ったツアーでも同様である。当然、来館者が日系人ではない場合では、エスニック背景に依拠した歴史に関する語りを出し合うことは難しい。しかし、「まとめの会話」の場では、意図的に議

論の場を設けることで、双方向のやり取りが可能となる。「まとめの会話」とは、トレーニングの際に必ず持つように指示されるドーセントと来館者とでツアーを回想する時間である。そのやり方はドーセントにより異なるが、多くの場合は質疑応答や感想の共有を来館者に提案する。ここでは、ユース層ドーセントたちが「まとめの会話」の進行方法をよく真似していた、H氏の事例を取り上げたい。この時の来館者は、過去に来館した友人からのすすめでH氏を指名した白人男性とアジア系女性の夫婦で、どちらも30代後半であった。一時間半ほどのツアーを終えた後、H氏が次のような問いを投げかけた³⁰⁾。「日系アメリカ人の戦時中の強制収容は正当だったと思いますか？」H氏によると、この質問は、いつも来館者に「まとめの会話」で問いかけるものであるという。白人男性はこれに対し、以下のような返答した。

あー……えーっと、僕の最初に出てきた答えは、完全にNOだ。なぜなら、……特に、彼らは財産を失っている。これはとても重要で、……これは、とても、大変な、……大変な質問 (huge question) だ。³¹⁾

この男性来館者は何度も言い淀み、最後はごまかすように早口で「大きな質問」であると繰り返すなど、戸惑いが見られた。この来館者は、アメリカ史だけでなく、妻の影響でアジアに関する知識もある人物で、ツアーの最中にもH氏や筆者に対して多くの質問を投げかけており、「まとめの会話」に至るまでは、はっきりと自分の質問や意見を述べており、この質問に対して何度も言い淀んだことが筆者の印象に残った。H氏は続けて、以下のように述べた。

なぜこの質問をするかという、このミュージアムのミッションは、この教訓 (lesson) を記憶する (remember) こと、そして二度

と起こさないことだからです。これは、現在でも、起こりうることなのです (It could happen now)。……9.11の後、ムスリムの人たちに何が起こったか見てください。……メキシカンの人たちに国境で何が起きているか見てください。彼らは、違法移民に見えるだけで拘留されているのです。

H氏は特に「現在 (now)」を強調するように発音し、印象付けていた。白人男性はすぐに反応して頷き返し、同意を示した。H氏は更に続けて、「現在」何が起きているのかを説明した。続いてH氏は二つ目の質問として、以下の質問を投げかけ、白人系男性ビジターとアジア系女性が返答している。

H氏「日系アメリカ人は、グループとしてどのような特徴 (character) や共通の価値観 (common values) を持っていると考えられますか？」

男性「僕は、僕の視点から言うと、最も大きなもののひとつは、コミュニティのために多くのことをしている点です。」

女性「私は、感謝 (kansha) だと思う。それから、」(男性が途中で遮り)

男性「僕は今日の経験から思い出したことがあったよ。トヨタだ。トヨタ方式だ。」

アジア系女性が感謝 (kansha) と日本語を出したのは、H氏がツアー中に度々、日系人の価値観として「感謝」「義理」「仕方がない」「我慢」などのよく挙げられる単語を紹介していたからである³²⁾。このように、二つ目の質問では、ツアーの中で学んだことをビジターに挙げてもらうような仕組みになっていた。以上、H氏の「まとめの会話」からは、ドーセントが意図的に対話の場を作り上げていることが明らかになった。ツアー中は一方的に解説と「ストーリー」を享受する立場にあった来館者を、議論の場に招

くことで、意図的に双方向的な対話を促進している。また、「今」の政治的状況を取り上げることで、エスニック背景を共有しない来館者にも、サンノゼにおける日系人の歴史と来館者自身との繋がりを強調することに成功しているといえる。最後にこれまでのツアーで来館者が「学んだ」ことを振り返り、印象づけた上でツアーを終了している。ドーセントによる「まとめの会話」という試みは、ツアーの中で最も来館者とドーセントの対話が促進される場であり、ドーセントがツアーに意図的に付与した「対話性」が顕著に現れる。

5.3 来館者との対話のドーセントへの影響

ドーセントと来館者の双方向的な対話は、ドーセント自身にも影響を与える。ここで来館者との対話について振り返るY氏の事例を取り上げたい。Y氏は日系二世の80代女性である。筆者がインタビューしたのは、Y氏がドーセントを始めてから半年が経った頃であった。Y氏によると、7月のある日、80代くらいの日本人女性2名と若い日本人女性1名のグループが来館したという。若い女性は英語ができ、80代女性の1名も簡単な英語で話すことができたが、もうひとりの80代女性はほとんど英語がわからなかった。その日館内には日本語を話せるドーセントは居らず³³⁾、ある程度日本語が話せるY氏がツアーの担当となった。Y氏は、子どもの頃両親との会話に日本語を使っており、また大人になってからも茶道の授業などで使っていたために調査時でも、本人曰く「下手ですけども」、日本語が話せる。Y氏は、英語が話せる若い女性に日本語を手伝ってもらいながら、初めて日本語でのツアーに挑戦した。そのツアーの中で、Y氏は、東京出身であった80代日本人女性来館者たちと東京大空襲前後の日本について話をしたという。まずY氏が強制収容所の中での生活をツアー中に語っており、その上で、日本人女性来館者も日本で小さい頃に戦争を経験したことをぽつりと語り始め

た。Y氏はその時のことを以下のように邂逅している。

Y氏「大統領令について説明していたときに彼女（日本人女性来館者の1名）は言ったんです。『ああ、それは日本が悪かったね』って。日本が先に攻撃して、パールハーバーが起こって、それで私たちがキャンプに送られたから。そこで私は言いました。そうだって。……でも、英語を喋れる女性との会話は本当に興味深かったです。彼女は私と完全に同じ年だった。そこで、私たちは比べ始めたんです、小さい頃に何が起こったか。彼女は、ほとんど敷物（rug）だけを着ていたと言いました。それから、彼女たちは食べ物が得られるかわかりませんでした。なぜなら、食べ物を手に入れるのがとても困難だったからです。」

筆者「他に気付いた点はありましたか？あなたは違った点が、まず食べ物と、そして服…」

Y氏「そう食べ物と服、それから学校。」

筆者「学校？」

Y氏「彼女たちは学校に行き続けることができませんでした。……私は気づきました。私たちの生活はもっと、普通（normal）でした。なぜなら、私たちは学校に行ったり、教会にも行ったり。ね？」（括弧内筆者注）³⁴⁾

Y氏は同じ年齢の日本人女性来館者と出会い、対話する中で、自らの強制収容所の記憶に対し、新たな気づきを得ている。それは、日本の戦中戦後の状況と比較すると、強制収容所内での生活は「普通」だったと述べている点に現れている。こうした気づきは、強制収容所が非人道的であり、「ひどい」状況であったことを主な主張とする展示及びY氏のツアー内容を否定しかねない。にも関わらず、Y氏は日本人女性来館者との対話のあと、特に日本人が来館した際には積極的に

日本における戦中戦後について言及するようになったという。Y氏は筆者に対して、いかにこうした来館者との対話が重要であるのか、Y氏自身の人生に対する思いと関連付けて語った。Y氏は、サンノゼ日系博物館でドーセントができて嬉しいという。Y氏にとって強制収容の経験は、人生で一番大事な時間ではないが、その経験によってサンノゼ日系博物館でドーセントをすることになり、そこで様々な人と対話することで、「わたしのすべての人生がつながったように思う」という。腕で輪を作りながら、自分の人生を表すY氏が筆者には印象的であった。このように、ドーセントと来館者との対話は、ツアー内容に影響するだけでなく、ドーセント自身の人生観の変容にも影響しているといえる。

6. おわりに

本稿の目的は、サンノゼ日系博物館において、ドーセントが行う館内ツアーに着目し、「フォーラムとしての博物館」が実現されているのかを検討することであった。ドーセントは、ツアーの中で来館者から、当事者性を有する記憶語りである「ストーリー」を収集、取捨選択し、次のツアーに応用していく。博物館内で語られる「ストーリー」には、常設展示の趣旨とは必ずしも一致しない語りまでも含まれていた。さらに、ドーセントと来館者は、ツアーの中で対話することによって、互いの意見や展示物に関する自らの記憶を共有する。来館者がドーセントから学ぶだけでなく、ドーセントもまた来館者から気付きを得ていた。以上のことから、サンノゼ日系博物館は多声性と対話性を有した「フォーラムとしての博物館」であると考えられる。

本稿の研究意義は、「フォーラムとしての博物館」の概念を実現している具体的事例を詳細に記述したことにある。これまで「フォーラムとしての博物館」の概念を用いた研究では、具体的な成立プロセスを明らかにしたものが少なかった (cf. 高倉編 2015)。本稿における事例の

詳述から、モノとして物理的な形に残らない展示もまた、「フォーラム」形成の鍵となりうるということが例示できた。能登路は、「多文化主義の潮流の中で『特権的な神殿』から『フォーラム』へと変化を遂げてきた博物館は、逆に閉鎖的な文化的境界をつくり、特定の人々が集合的記憶で武装した神殿となる可能性をもはらんでいる」と指摘する (能登路 1999: 206-207)。これは、「ストーリー」として語られるような個人的記憶が、特定の基準で取捨選択され、固定化していくことで起こると考えられる。展示物が物理的なモノである以上、常に議論の続く「過程」であるという「フォーラム」の条件を完全に満たすことは難しい。対して、サンノゼ日系博物館におけるドーセント・ツアーは、ドーセントが来館者との対話によって進行され、「ストーリー」は常に収集され、更新されていくため、全く同じツアーが行われることはない。ツアーの構造として、常に変容していくことが前提とされているのである。

こうした事例からは、「フォーラムとしての博物館」を分析する従来の枠組みとはやや異なる視点が有用であることが提示できたと考える。「フォーラムとしての博物館」という概念が生み出された背景には、「展示する側」が「展示される側」の文化を一方的に展示として作り上げ、「見る側」に提供していた1980年代以前における博物館のあり方がある。それゆえに、「展示される側」がいかに展示制作へ参加するののかといった点が、「フォーラムとしての博物館」に関する研究の中心的な関心となっていた。本稿では、「展示する側」であるドーセントと「見る側」である来館者の相互行為によって、ツアーが作り上げられていた。言い換えるならば、サンノゼ日系博物館におけるツアーは、ドーセントと来館者が協働することによって成立するものであった。従来の分析枠組みでは、サンノゼ日系博物館は「展示される側」であったマイノリティによる自文化展示の博物館であるという結論に留

まる。しかし、本稿では、館内で重要となる関係性、すなわち、「展示する側＝展示される側」と「見る側」、および、「展示する側」と「見る側（＝展示される側）」との関係性へ注目した。ドーセントと来館者が協働する博物館であることは、こうした関係性から導き出されたものであり、他の自文化展示の博物館を分析する際にも、有用であるのではないと言える。

最後に、本稿で言及することができなかった今後の課題について述べる。第一に、他の博物館との比較によって、本事例の独自性や特殊性を検討できていない点である。特に、同じ日系人を展示する博物館と比較することで、日系人博物館の普遍的な特徴とすべき部分があるのか否かを検討できていない。第二に、アメリカという社会の中に、サンノゼ日系博物館のような「フォーラムとしての博物館」を位置付けられていない。特に、博物館が設立された1970年代の文脈、そして筆者が参与した2016年から2017年の文脈では、日系人を含むマイノリティを取り巻く社会状況が大きく変化している。これらの点については、今後さらに検討していきたい。

謝辞

本稿は平成29年度鹿児島大学大学院人文社会科学部研究科に提出した修士論文「ミュージアムと記憶——サンノゼ日系アメリカ人博物館を事例に」における第三章および第四章の一部を大幅に書き改めたものである。本稿の執筆にあたり、平成28年度鹿児島大学進取の精神長期留学プログラムによる助成を受けた。本稿の執筆をご指導頂いた平井京之介先生、査読に当たられた2名の査読者の方々からは多大な示唆を頂いた。感謝致します。また、調査にご協力頂いたサンノゼ日系アメリカ人博物館のみなさまに、深く御礼申し上げます。

注

1) 観光地の評価サイトであるトリップアドバイザー

ザー (Trip Advisor) やイエल्प (Yelp) でも展示物だけでなく、ドーセントによる館内ツアーに言及されている他、館内にある感想ノートにも感想が書き込まれており、概ね高い評価を得ている。「Trip Advisor: Japanese American Resource Center/Museum」URL: https://www.tripadvisor.com/Attraction_Review-g33020-d561278-Reviews-Japanese_American_Resource_Center_Museum-San_Jose_California.html?m=19905 (最終閲覧: 2018年9月28日)

「Yelp: Japanese American Museum of San Jose」URL: <https://www.yelp.co.jp/biz/japanese-american-museum-of-san-jose-san-jose> (最終閲覧: 2018年9月28日)

- 2) 大ベイエリア (Great Bay area) とは、サンフランシスコ湾岸地域の広域都市圏であり、サンノゼやサンタクララ平原も含まれている。ただし、行政区分などの明確な範囲の設定はなく、人によって指す範囲が異なる。
- 3) 「Japanese American Museum of San Jose: ABOUT」URL: <http://www.jamsj.org/japanese-american-history-museum-san-jose/about> (最終閲覧: 2017年12月9日) 同内容はパンフレットにも記載されている。
- 4) なお、本稿では来館者のなかでも、約3割に留まる日系人来館者とドーセントの関係を特に重視して取り上げている。多数派である非日系人来館者は一部に登場するのみである。その理由は、本稿がドーセントによるツアーの構築を中心に分析をしている為であり、ツアーには当事者性のある語り、つまり、展示物に関する記憶を有した当事者による語りを採用されるからである。
- 5) City of San Jose 「Population」URL: <http://www.sanjoseca.gov/index.aspx?NID=2044> (最終閲覧: 2018年1月12日)
- 6) City of San Jose 「FACT SHEET: HISTORY & GEOGRAPHY」URL: <http://www.sanjoseca.gov/DocumentCenter/View/780> (最終閲覧: 2018年1月12日) 自己認識に基づく調査結果。
- 7) 現在はSan Jose State Universityという名称になっている。
- 8) The San Jose Commission on the Internment of Local Japanese-Americansによる調査である。
- 9) 博物館内部資料より。
- 10) 大人8ドル、65歳以上5ドル、学生5ドル、5歳以下の子どもは無料である。また現役軍人とその家族、ハワイ日本文化センターも同じく無料

- となっている。なお、サンノゼ日系博物館にはメンバー制度があり、年会費を払うとメンバーズカードが発行され、一年間随時入館可能となる(2018年現在)。
- 11) 第二次世界大戦において、日系人のみで構成されたアメリカ軍の一部隊。
 - 12) サンノゼ日系博物館内で使用されている年齢の区切りと呼称に基づいている。なおユース層で、名前だけドーセントとして登録したまま、筆者の調査期間中に一度も見なかった人物は人数から外している。
 - 13) ヤマイチ氏はサンノゼ日系博物館の前身組織であるサンノゼ日系アメリカ人資料センターが発足される際、サンノゼ日本町の重要人物のひとりとしてオキヒロ氏に招集されて以来、サンノゼ日系博物館を牽引する人物であった。2018年現在の常設展示は、ほとんどがヤマイチ氏によって制作されたものであるという。
 - 14) この冊子は全員が持っているものではない上に、持っていても使いながらツアーをする様子はほとんど見られなかった。実際、筆者の観察中に冊子を手を持ったままツアーをやっていたのは2名の日本人ドーセントだけであった。
 - 15) サンノゼ日系博物館では、個人的な記憶のオーラルヒストリーを「ストーリー」と呼んでいる。アーカイブとして残す他、インターネット上に書き起こしと共に公開し共有する活動を行っている。その代表的なプロジェクトが「Sharing the story: An Oral History Project」である。URL: <http://jamsj.org/oralhistory/index.html>
 - 16) カリフォルニア州北部、オレゴン州との州境付近にあった強制収容所。全米の収容所の中でも最大の規模かつ収容人数であった。収容所の中に監獄があり、過激な行動を取った者たちが収監され、また他の収容所から不忠誠組や「ノー・ノー」と呼ばれる人とその家族が移送されてきた場所としても有名である。ノー・ノーに関しては注34を参考にされたい。
 - 17) 2017年1月29日D氏のドーセントツアーに関する筆者のメモより。筆者日本語訳。
 - 18) サンノゼ日系博物館のドーセントで、カリフォルニア州立大学イーストベイ校エスニックスタディーズの講師Dean Adachi氏が主催。
 - 19) 例えば、ロサンゼルスのリトル・トーキョーに所在する全米日系人博物館 (Japanese American National Museum) では、ドーセントの教育のためのプログラムが組まれており、すべての行程をこなした人だけがドーセントになることができる。また、ドーセントはツアー中に自分自身の記憶を「ストーリー」として来館者に提供することはほとんどないという。徹底した教育とマニュアルによるツアーは、誰が行っても一定の質を確保できる点で、効率的かつ有用である。対して、ドーセントの取捨選択に委ねられるサンノゼ日系博物館におけるツアーは、内容や質がドーセント自身の背景に大きく左右される。2017年10月17日全米日系人博物館M氏へのインタビューより。
 - 20) 筆者フィールドノート2016年12月。筆者日本語訳。
 - 21) 2016年11月25日R氏のドーセントツアーの筆者メモより。筆者日本語訳。
 - 22) 2016年11月25日R氏のドーセントツアーより。筆者日本語訳。
 - 23) 指された鞆は実際にはR氏の鞆ではなく、寄贈されたもののひとつ。
 - 24) 2016年11月25日R氏のドーセントツアー後の会話。筆者日本語訳。
 - 25) 2017年2月19日の筆者フィールドノートより。全て日本語での発話。
 - 26) マウンテンビュー (Mountain View) は、サンタクララ平原内の地名。
 - 27) 1941年当時のマウンテンビューは農業地帯であり、日系人が多く働いていた。日系人が収容所へ行くことが決定した際、持っていくことができない日系人の所有物をタダ同然の安値で強引に買い叩かれたという話がある。トラクターなどの農機具から家具や食器類、家宝の刀まで、取られた、もしくは買われたモノに関する語りは、集合センターに送られる直前の話として、よく語られる。
 - 28) ノー・ノー (No-no) もしくはノー・ノー・ボーイ (No No Boy) とは、強制収容所内で行われた忠誠登録と呼ばれる調査において、27番目と28番目の質問に、どちらもNoと答えた人、どちらかをNoと答えた人、または答えなかった人を指す。彼らの様々な事情は考慮されず、ひとまとめにアメリカ合衆国へ「不忠誠」と見なされ、ツーレイク強制収容所へと集められた。日系人社会内部においてノー・ノーであることは、アメリカ人として同化に努めた多くの日系人と立場を異にしていたため、排除・差別の対象となった。戦後から近年に至るまで影響を及ぼしており、V氏の父は亡くなるまで親友にさえノー・ノーであったことを隠し通したという。
 - 29) このような中高年層以上の日系人と白人の友

人たちという組み合わせのグループは、筆者が参与している間によく見られる来館者の組み合わせであった。日系人來館者の目的は友人や家族に博物館を見せることであり、日系人來館者の主要な利用目的のひとつである。

- 30) 2016年10月30日H氏ドーセントツアーでの筆者のメモより抜粋、筆者日本語訳。
- 31) 2016年10月30日H氏ドーセントツアーでの筆者のメモより抜粋、筆者日本語訳。
- 32) これらの言葉は、一世が二世に教えた言葉であるとして、サンノゼ日本町ではモニュメントとして街角に建てられ、顕彰されている。
- 33) 基本的に日本語対応のドーセントは居ない。事前にツアーの予約がある場合に依頼されるか、バイリンガルのドーセントが時折居る程度である。
- 34) 2017年9月22日筆者によるインフォーマルインタビューの途中の会話より。筆者日本語訳。二重括弧内は日本語で発言された。

参考文献

日本語文献

東栄一郎

2014 『日系アメリカ移民 二つの帝国のはざままで一忘れられた記憶1868-1945』明石書店。

伊藤敦規

2015 「国立民族学博物館における研究公演の再定義—『ホピの踊りと音楽』の記録とフォーラムとしてのミュージアムの視点からの考察」『国立民族学博物館研究報告』39(3): 397-458。

粕谷 崇

1992 「博物館とインタープリター」『国学院大学博物館学紀要』17: 19-27。

斉藤政美

2007 「展示解説員の業務とそれを育てる取り組み」『博物館研究』42(5): 16-20。

佐藤優香

2002 「博物館におけるフォーラムとしてのワークショップ—『みんなくみックスプレートひろば』の事例から」『国立民族学博物館調査報告』26: 141-159。

新日米新聞社

1961 『米国日系人百年史—在米日系人発展人士録』新日米新聞社。

杉浦 直

2013 「エスニックな場所の再構築—サンノゼ日本町におけるエスニック表象—」『季刊地理学』65(2): 69-89。

高倉浩樹編

2015 『展示する人類学—日本と異文化をつなぐ対話』昭和堂。

竹沢尚一郎編

2015 『ミュージアムと負の記憶—戦争・公害・疾病・災害：人類の負の記憶をどう展示するか』東信堂。

ウィリアム ジュニア グリティ・南川文里

2006 「水平移動・人種・アメリカ化—移民をめぐるマスターナラティブ批判」樋口映美・中條猷（編）『歴史のなかの「アメリカ」—国民化をめぐる語りと創造』、pp. 349-368、彩流社。

西村仁志

2016 「インタープリテーション活動の新しい動向」『同志社政策科学研究』特集号: 91-98。

ジョン H フォーク・リン D ディアークキング（高橋順一訳）

1996 『博物館体験—学芸員のための視点』、雄山閣出版。

能登路雅子

1999 「歴史展示をめぐる多文化ポリテクス」油井大三郎・遠藤泰生（編）『多文化主義のアメリカ—揺らぐナショナル／アイデンティティ』pp. 187-208、東京大学出版会。

南川文里

2007 『「日系アメリカ人」の歴史社会学—エスニシティ、人種、ナショナリズム』彩流社。

吉田憲司

1999 『文化の「発見」—驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』岩波書店。

2013 『文化の「肖像」—ネットワーク型ミュージオロジーの試み』岩波書店。

英語文献

Cameron, Duncan

1972 “The Museum: a Temple or the Forum,” *Journal of World History*, 4(1): 189-202.

City of San Jose

2016 FACT SHEET: HISTORY &

- GEOGRAPHYURL. <http://www.sanjoseca.gov/DocumentCenter/View/780> (最終閲覧: 2018年11月1日)
- 2017 Population. <http://www.sanjoseca.gov/index.aspx?NID=2044> (最終閲覧: 2018年11月1日)
- Fukuda, Curt and Ralph M. Pearce
2014 San Jose Japantown: a journey. San Jose, California: Japanese American Museum of San Jose.
- Japanese American Museum of San Jose
2016 Sharing the story: An Oral History Project. URL: <http://jamsj.org/oralhistory/index.html>
- 2018 Japanese American Museum of San Jose: About. URL: <http://www.jamsj.org/japanese-american-history-museum-san-jose/about> (最終閲覧日: 2018年11月1日)
- Karp, Ivan and Steven D. Lavine (eds.)
1991 Exhibiting Cultures: The Poetics and Politics of Museum Display. Smithsonian Institution Press.
- Lord, Barry and Gail Dexter Lord
2002 The Manual of Museum Exhibitions. Walnut Creek, California: Altamira.
- Lukes, J. Timothy and Y. Gary Y. Okihiro
1985 Japanese Legacy: Farming and Community Life in California's Santa Clara Valley. Cupertino, California: De Anza College California History Center.
- Web ページ**
- Trip Advisor
2018 「Japanese American Resource Center/Museum」 URL: https://www.tripadvisor.com/Attraction_Review-g33020-d561278-Reviews-Japanese_American_Resource_Center_Museum-San_Jose_California.html?m=19905 (最終閲覧: 2018年9月28日)
- Yelp!
2018 「Japanese American Museum of San Jose」 URL: <https://www.yelp.co.jp/biz/japanese-american-museum-of-san-jose-san-jose> (最終閲覧: 2018年9月28日)
- (2018年12月6日 採択決定)

Ethnography of Docent Tours:

A Case Study of the “Museum as a Forum” at the Japanese American Museum of San Jose

MATSUNAGA Chisa

Department of Regional Studies
School of Cultural and Social Studies

SOKENDAI (The Graduate University for Advanced Studies)

Summary

The Japanese American Museum of San Jose (JAMsj) in Japantown, San Jose, California, United States, is a museum that presents the history of local Japanese Americans. This paper discusses the “Museum as a forum” at JAMsj by focusing on Docent Tours, which are planned and conducted by docents. The idea of the “Museum as a forum”, which was proposed by Duncan Cameron in 1971, presents a new concept of museums. This idea eventually became featured both in research and practice as a guideline for museums in the latter half of 1980s, when traditional type of museums came to be critically reexamined. However, there is little literature that gives concrete examples of the idea of the “Museum as a forum”. This paper seeks to present detailed examples to analyze and provide a different perspective from the existing framework.

The Japanese American Museum of San Jose, which is relatively small in size, is a museum that shows the local history of Japanese American in San Jose by themselves. Generally, the Docent Tours provides an explanation of the exhibited objects and there are no standardized manuals, and therefore the explanations differ depending on the docent and visitors. This paper explores how docents construct and conduct their own tours inside the museum. The author categorized docents in to two types: Nisei and Sansei docents who have personal memories and experiences from before or during World War II and other generation Japanese Americans and non-Japanese American docents who do not. Those who have memories of life in the Japantown and of incarceration to camps during WW2 often use their own memories when they explain the objects. In case of guiding visitors who have such memories and experiences, the docent tours serve as a place where both docents and visitors can share their memories and experiences each other. On the other hand, younger generation Japanese Americans or non-Japanese American docents collect stories from older docents or visitors who have such memories and experiences through the Docent Tour and sort them for use when conducting other tours. Stories collected from older docents or visitors do not necessarily match with the stories represented by the objects, which leads to a variety of perspectives to be shared by both docents and visitors. Visitors and docents alike develop new awareness. It can be concluded that that JAMsj can serve as a museum with interactivity and a “Museum as a forum” with interactivity and multiple voices.

Key words: Japanese American, museum, Museum as a forum, docent, Docent Tour, narrative, share